

令和 2 年 6 月 12 日現在

機関番号：12603

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2018～2019

課題番号：18H05635・19K20841

研究課題名（和文）地域構造の変化と民俗芸能の継承に関する民俗学的研究

研究課題名（英文）A Case Study of Changing Social Structure and Cultural Transmission of Folk Performing Arts in Japan

研究代表者

松岡 薫 (MATSUOKA, Kaoru)

東京外国語大学・アジア・アフリカ言語文化研究所・研究員

研究者番号：90824350

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、俄（にわか）という民俗芸能を対象とし、少子高齢化や過疎化の影響によって民俗芸能の担い手が減少しているという現代的状況において、民俗芸能がいかに継承されているのかを動態的に明らかにするものである。

本研究では、祭礼への参与観察と俄の演者へのインタビュー調査を実施し、今日の民俗芸能においては個人の選択やライフコースのあり方にくわえて、民俗芸能の「文化財」化が継承に大きく作用していることを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の成果は、現代の少子高齢化や過疎化といった社会問題に対する地域社会の対応について考察するものであり、広く社会に有益な資料と知見をもたらすものである。とくに、近年は民俗芸能を文化財として保存、活用する動きが活発化する一方で、地域においては担い手の確保に苦慮するというジレンマを地域社会が抱えている今日の状況もある。こうした社会的背景も踏まえ、民俗芸能の継承過程について微細に分析する必要性を認識した。

研究成果の概要（英文）：In this study I examined how local people carry on their folk performing arts in the face of declining birthrate and aging population in contemporary Japan. I conducted my field research in Takamori town, Kumamoto prefecture. The town is famous for the folk performing art called as "Niwaka," which has recently been registered as a cultural property. My research suggested that local people were trying to maintain and recreate Niwaka practice through their participations free from the conventional role structure while the number of young actors was decreasing.

研究分野：民俗学

キーワード：俄 民俗芸能 継承 地域変容 地域社会

1. 研究開始当初の背景

2000年代以降、日本の民俗芸能はユネスコ(UNESCO)の無形文化遺産に関する代表一覧表への記載や、東日本大震災後以降においてコミュニティ復興の資源となるなど社会的関心を集めている。くわえて、近年では地方創生との関わりの中なかで、民俗芸能を地域の貴重な文化財/文化資源としていかに保存、活用していくのかという議論が活発化している。その一方で、地域社会においては少子高齢化や過疎化の影響を受け、民俗芸能の演者や担い手が減少しており、民俗芸能をいかに次世代へ継承していくのが喫緊の課題となっている。こうした現代的状況に因應するため、民俗芸能研究においても民俗芸能の演者や担い手、それを支えるコミュニティに関する議論が活発化している(大石泰夫 2007『芸能の 伝承現場 論』ひつじ書房、俵木悟 2018『文化財/文化遺産としての民俗芸能』勉誠出版、など)。

同時に、民俗学における芸能研究も芸能の「型」から「演者」へと研究の焦点を移し、民俗芸能の担い手自身に注目することの必要性が研究上も高まった。1990年代以降、民俗芸能研究においては民俗芸能の継承を固定的で本質的なものとする古典的な想定を乗り越え、社会的なプロセスの中なかで継承されるものとして民俗芸能の動態を記述するという課題が広く共有されてきた。こうした学問的転換の画期となった論文集『身体の構築学』(福島真人編、ひつじ書房、1995年)では、上演や稽古の場に注目し、民俗芸能を社会的に構築された身体技法として捉える研究アプローチが展開された。なかでも、同論集に収められた橋本裕之の論考「民俗芸能」における言説と身体」は、民俗芸能の演者集団を「演技の共同体」とし、個人が演者集団のコミュニティに参加し、その参加を通じて演技や演者としてのアイデンティティが獲得されるという主体的で能動的な芸能の継承過程を描き出した。

しかしながら、橋本の提唱する「演技の共同体」は、少年がいずれ芸能の担い手として「演技の共同体」に参加するという単線的なライフコースを暗に想定したものであり、安定的で閉じた共同体像を前提とする点に課題を残す。とくに少子高齢化や、就職・進学などによる都市部への人口流出が進む現代日本において、「演技の共同体」論には議論の限界がある。こうした背景から、本研究は民俗芸能の継承にかかわる現代的な実践知のあり方を社会的プロセスという視点から探究する狙いのもと、「人口構造の変化に直面する地域社会において、民俗芸能の継承がいかに可能となっているのか」という問いを設定した。

2. 研究の目的

本研究では、上記の課題に取り組むため、地域社会の現代的状況における民俗芸能の継承過程が、いかなる社会的プロセスであるのかを、民俗芸能を担っている人びとや、その背景にあるコミュニティ、歴史的経緯などに注目したフィールドワークによって明らかにする。

具体的には、個人のライフコースが多様化している現在、民俗芸能の担い手継承の社会的プロセスがいかなる条件や要因の中なかで生み出されるのかを検討する。さらに、現代の地域社会では、直接的な担い手である演者だけでなく、地域住民や観光客、行政担当者や教育関係者、研究者などの様々な立場性をもった人びとの関与のもとで民俗芸能が演じられている。こうした民俗芸能を取り巻く様々なアクターの存在や関係性にも注目する必要がある。

3. 研究の方法

本研究は、大学院から継続して研究してきた俄(にわか)という民俗芸能を研究対象とする。

俄は、10分程度の滑稽芝居で、世相風刺や機知に富んだ笑いの表現を盛り込むという特徴がある。俄は毎年演目が作られ、一夜限りの演技であることを特徴とするため、常に新たな演技が作られるという特性をもつ。民俗芸能が継承される社会的プロセスを動的に理解しようとする本研究にとって、このように創造的で即興的な側面をもつ俄は、適切な研究対象である。

本研究では過去の調査資料を活用し、現代民俗論として新たに展開するために、申請者がすでに俄の調査研究に着手している3地域（熊本県阿蘇郡高森町、長崎県南松浦郡新上五島町有川郷、岐阜県美濃市）を調査地とした。これらの地域は、熊本県高森町が中山間地域、長崎県有川郷が島嶼地域、岐阜県美濃市が城下町地区と、人口動態にかかわる地理的条件が異なる点において、人口動態と民俗芸能の継承との関係を比較検討するうえで適切な研究対象地域であると考えた。

4. 研究成果

本研究課題にかかる主要な調査として、祭礼当日の参与観察を中心とする夏期調査（岐阜県美濃市は春期調査）に加え、俄の演者たちへのインタビュー調査を中心とする冬期調査を実施した。

まず、ライフコースの多元化により演者の獲得が困難になりつつあるという今日の状況において、地域住民が「演者になる」ことをいかに選択しているのかを実証的に検討した。具体的には、俄の上演や稽古の場に関わる地域住民に対し、社会統計学上の基礎データ（年齢、性別、職業、家族構成など）の収集と、向上会員を中心とする関係者へインタビュー調査を行った。さらに、数名の地域住民のライフヒストリーから、進学・就職・結婚といったライフイベントにおける彼らの人生選択を社会経済的な背景との関連から検討した。

調査の過程から、高森町では町内に住む20～30代男性が俄の演者になるという規範がある一方で、演者となるべき全ての者が演者コミュニティに参加しているわけではなく、演者コミュニティへの参加/不参加は個人の選択によることがわかった。また、演者の多くが進学や就職を機に一度、町外に出て再び戻る、いわゆるUターン者であることもわかった。Uターン者が演者になる傾向が高い理由については、今後さらなる検討を要するが、祭礼における俄の上演の場が町内の住民としてのUターン者の社会的なアイデンティティを示す場として機能しているからではないかと想定している。

つぎに、人口減少による担い手減少のなかで、民俗芸能をどのように実践するのかという社会的な課題に対し、地域住民がいかに対応し、解決しようとしているのかを検討した。

報告者は本調査を遂行するなかで、2つの大きな出来事を観察した。1つは、熊本県高森町の俄が「高森のわか」として国選択の無形民俗文化財に選ばれたことである。もう1つは、長崎県新上五島町の俄が、九州地区民俗芸能大会に初めて出場したことである。いずれの俄もこれまでは「文化財」という文化行政の枠組みと交わることなく実践されてきた。

これらの出来事は、担い手不足が懸念されるなか、「文化財」となることで芸能を伝承していくことを積極的に選択した結果だといえることができる。こうした近年の俄を取り巻く新たな動きは、地元の教育委員会等をはじめとした文化行政に関わる人たちからの働きかけや、祭りや俄を観光資源として活用しようとする祭りの実行委員会の人たちの思惑なども観察できる。そのような地域住民自身による生存戦略を明らかにできたことは本研究の成果である。

ただし、「文化財」という外部からの価値付け・意味付けが芸能自体や地域社会にどのような影響を及ぼしていくのかという点については注視する必要がある。たとえば「文化財」に指定されたことで、これまで自由に演じていた俄の演技に何らかの規制がかかることも考えられる。し

たがって、「文化財」化が芸能実践にどのような影響を与えるのかについて、今後も継続して調査したい。

本研究で対象とした俄に限らず、現代日本の民俗芸能の多くは担い手不足によって廃止や休止の危機に直面している。今後は本研究によって得られた考察を理論面・実用面で一般化することによって、地域住民や行政関係者への支援や提言につなげていきたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 松岡薫	4. 巻 23
2. 論文標題 にわか演技の作られ方 台本なしの稽古に密着して	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 FIELDPLUS	6. 最初と最後の頁 24-26
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 松岡薫
2. 発表標題 俄における演目と演技の制作技法
3. 学会等名 日本民俗学会第71回年会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 松岡薫
2. 発表標題 北部九州における俄の上演 形式・演目・即興性
3. 学会等名 民俗芸能学会年次大会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

「高森のにわか」国選択無形民俗文化財へ
『熊本日日新聞』2019年4月3日（寄稿）

「肥後にわか 笑いの来た道」第8回
『熊本日日新聞』夕刊 2018年12月28日（取材協力）

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----